

おおかみと人

小川未明

青空文庫

未開な小さな村がありました。町へいくには、山のすそ野を通らなければなりませんでした。その間はかなり遠く三里もありまして、その間には、一軒の人家すらなかつたのであります。

春から夏にかけては、まことに景色がようございましてけれども、秋の末から冬にかけては、まったくさびしゅうございました。けれど、その村の人は、町までいくには、どうしてもその高原を通らなければならなかつたのです。

この辺には、おおかみがときどき出て、人間を食つたことがあります。また、きつねが出て、人をばかしたこともあります。冬になって雪が降ると、人々は、一人でこの路を通ることをお

それました。

村に^{むら}獵^{かり}人^{ゆうど}のおじいさんが住^すんでいました。このおじいさん

は、長^{なが}年^{ねん}獵^{かり}人^{ゆうど}をしていまして、鉄^{てつ}砲^{ぽう}を打^うつことの大^{だい}名^{めい}

人^{じん}でありました。どんな飛^とんでいる鳥^{とり}も、走^{はし}っているうさぎも、

またくまや、おおかみのような猛^{もう}獣^{じゆう}も、たいてい的^{まと}的^{めい}をつけた

ものは、そらさず一^{ぼつ}発^うで打^とち止^とめるといふほど上^{じよう}手^ずでありまし

た。

このおじいさんが日^ひごろいつていますのには、

「くまや、おおかみのような猛^{もう}獣^{じゆう}は、かえつてやさしい情^{なさ}け

があるもんだ。昔^{むかし}から人^{にん}間^{げん}が谷^{たに}に落^おちてくまに助^{たす}けられたり、

また路^{みち}に迷^{まよ}つて、おおかみにつれてきてもらつたりした話^{はなし}がある

が、それはほんとうのことだ。「といつていました。

しかし、どのくまも、おおかみも、人間に害をしないというのではありません。そんな人を助けるといふようなことは、じつにまれな話であります。山や、野や、谷に食べるものがなくなつてしまうと、人間の村里を襲つてきます。そして、人間を食べたり、家畜を取つたりします。

この村の人々も、雪が積もると、おおかみや、くまに襲われることをおそれました。けれど、上手な猫人のおじいさんが住んでいるので、みなは、どれほど安心していたかしれません。ある年の冬には、三頭のくまが村を襲つてきましたのを、おじいさんは一人で打ち止めてしまつたからでありました。

おなむら 同じ村に、よすけ 与助という才さい走はしった男おとこが住すんでいました。この男おとこは、きわめて口くち先さきのうまい、他人たにんの気きをそらさぬので、みんなからりこう者ものの与助よすけといわれていました。

ある冬ふゆの一日いちにち、与助よすけは村むらの人ひとたちと町まちへ出でました。そして、彼かれ一人ひとりは、酒さけを飲のんで帰かえりがおくれてしまいました。その日ひは、いっになくいい天気てんきでありましたうえに、まだ日ひもまったく暮くれないから、泊とまらないで急いそいで村むらに帰かえろうと思おもって、いい気き持ちもで雪ゆき路みちを帰かえっていききました。

彼かれは、高こう原げんを一人ひとりで通とおるのもそんなにさびしいとは思おもわなかつたのです。真まつ赤かな夕ゆう日ひは、山やまに沈しずみかかつて、ほんのりあまと余あまりの炎ほのおが雪ゆきの上うへを照てらしていました。明日あすもまた天てん気きとみえて雪ゆき

の上はもはや幾分か堅くなつて凍つています。その上を彼は、さくりさくりと朝きたときの路を歩いて、鼻唄をうたつてきました。

西の方の山々は、幾重にも遠く連なつていて、そのとがった巔が、うす紅い雲一つない空にそびえていました。まったく、あたりはしんとして、なんの声もなかつたのです。

与助は、だんだん酒の酔いもさめてまいりました。そして、一刻も早く村に帰ろうと思ひました。このとき、かなたの森の方で、オーオというおおかみの鳴き声を聞きました。彼は、それを聞くと、ぞつとしました。

まだ村の火は見えないか、早く村に入りたいものだ、もしおお

かみに見^みつかつたら、食^くわれてしま^まうだ^らうと思^{おも}つて、いつしよ
うけんめいに歩^{ある}き出^だしました。そして、後^{うしろ}方を振^ふり返^{かえ}つてみます
と、真^まつ黒^{くろ}な大^{おお}きなものが、雪^{ゆき}を砕^{くだ}いて、こつちにだんだんと迫^{せま}
つてくるのであり^ありました。

与^{よすけ}助^{あし}は、足^{あし}がすくんでしま^まいました。そして、もう一^ほ歩^{うご}も動^{うご}
ことができなかつたほど、おそれを覚^{おぼ}えたのであり^あります。彼^{かれ}は自^じ
分^{ぶん}の命^{いのち}は助^{たす}からないものだと思^{おも}いました。なぜ、もつと早^{はや}く帰^{かえ}
なかつたらう。そう思^{おも}うと酒^{さけ}を飲^のんだとい^いうことを後^{こうかい}悔^{かい}しまし
た。みなといつしよに家^{うち}へ帰^{かえ}つていたら、いまごろは、安^{あん}楽^{らく}に
いろりのそばで話^{はなし}をしていられるのだらうと思^{おも}いました。けれど、
いくら後^{こうかい}悔^{かい}しても、なんの役^{やく}にもた^たちませ^せんでした。おおかみ

は、だんだん彼かれに迫せまつてきました。

与助よすけは、心こころの中うちで神かみさまや仏ほとけさまに、どうか命いのちを助たすけてくださるようにと祈いのりはじめました。すると、おおかみは、もうすぐそこまで近ちかづいて、雪ゆきの上うえを踏ふみ碎くだく足音あしおとすら聞きこえたのであります。

与助よすけは、自分じぶんの命いのちはないものだときらめました。そして、彼かれは振り向むいて、迫せまつてきたおおかみに向むかつていいました。

「私わたしは死しんでもいいが、家うちには、妻つまも子供こどももある。もしおまえが私わたしの命いのちを助たすけてくれたら、おまえの欲ほしいものはなんでもやる。家うちには、にわとりが五羽わも六羽わもいる。おまえが私わたしを食たべてしまわないなら、にわとりを三羽ばおまえにやるから、どうか私わたしの命いのちを

助けてもらいたい。」と頼みました。

与助がこういいますと、おおかみは、ぴたりと雪の上に歩みを

止めました。そして、しばらくじっとして動きませんでした。与

助は、いつか猫人のおじいさんが話したことを思い出して、

おおかみが情けを感じてくれたのではないかと考えました。

彼は、なんとなく後ろ髪を引かれるような気持ちでしたが、

おそるおそる前に向かって、歩き出しました。すると、おおかみ

は、まったく彼のいったことを聞きわけたものとみえて、害を加

えるようすもなく、与助の後について歩いてくるのでありました。

与助は、たびたび後を振り向いてみるだけの勇氣もありません

でした。おおかみは彼の後ろ一、二間も離れて、のそりのそりと、

ともをするようについてきました。

「家へいったら、にわとりを三羽やるぞ。」と、与助は、ちよ
ど念仏を唱えるように、同じことを繰り返していいながら歩き
ました。

おおかみが彼に対して、まったくなにもしないということ
を悟ると、彼は、心でいろいろのことを考えはじめました。

「早く、村の灯火が見えてくれればいい。」と思ったり、また、
「にわとりを三羽やる約束をしたが、どのにわとりをやったら
いいものだろう。」と思ったりしました。

しかし考えてみると、やるようなにわとりはなかったのです。
いずれも去年の秋高い値を出して買ったので、いま、卵をよ

く産んでいたのでありました。それをおおかみにやってしまふのはまったく惜しいことでありました。けれど、彼は自分の命には換えられないからと思ひました。そんなことを考へているうちに、はるかかなたに村の灯火が望まれたのであります。

「家へいったら、にわとりを三羽やるぞ。」と、与助は同じことを口では繰り返していましたが、だんだんにわとりが惜しいという心が前よりも募つてきました。

なにも自分は、おおかみににわとりをやらなければならぬという理由はないはずだ。おおかみが人間の命を取ろうとするのこそまちがっているが、自分がおおかみに、にわとりをやらなければならぬという理由はないであろう。これは、こうしておおかみ

をだましておいて、村に入ったら大きな声を出して叫べばいい。そうすればみんなが飛び出してきて、おおかみを殺してくれるからと思いました。

彼は、とうとう村に入りました。どの家も、日が暮れてしまつて寒いので戸を閉めていました。与助は思いきつて大きな声を出すことができませんでした。もしまちがったら、おおかみに食ひ殺されてしまうと思つたからであります。

「家へいったら、にわとりを三羽やるぞ。」と、与助は、やはりいいつづけて歩きました。そして、彼はついに自分の家の戸口に着いたのであります。そのとき、彼はちよつと振り返つてみますと、黒いおおかみは、すこし彼から離れたところにきて立ち止ま

つていました。

「どれ、家へ入つてから。」と、与助はいつて、戸を開けて躍り込みますと、あわてて後ろ戸をピーンと閉めてしまいました。そして、堅く棒をかつて、にわとり小舎の前について、内をのぞいてみますと、六羽のにわとりは、よくふとつて、とまり木に止まつて安らかに眠っていました。

「どうして、このいいにわとりを一羽だつてやれるものか。毎日卵を産んでいるのに。」と、与助は独り言をしました。そして、いくらおおかみが暴れたつて、あのじようぶな戸を破つて入ることはできない。もしそんなときは、鉄砲も刀もあると考えました。

彼は、それよりおおかみへの約束などはかまわずに家へ上が
つて、今日はまず無事でよかつたと喜んで、夕飯の膳に向か
つて、酒を飲みはじめたのであります。

彼は、戸の外に立っているおおかみはどうしたろうと思いまし
たが、まさか開けてみるだけの勇氣もありませんでした。彼がだ
いぶさかずきを重ねて、いい心持ちになつたころ、ちようど村
はずれの方にあたつて、ものすごいおおかみの鳴き声を聞いたの
であります。彼はあまりいい気持ちはいしませんせした。

「やはり畜生などというものは知恵のないものだ。とうてい、
知恵のある人間には勝てるものでない。」といいました。彼は、
明くる日昨日あつた事柄を村の人々に語つて、自分がうまく

おおかみをだましてやったと誇ほこりました。

「人にんげん間の命いのちを取とろうなんていうのが、ふらちなんだから、おおかみの約やくそく束たばを破やぶつたつてさしつかえない。」と、与助よすけはいつていました。

「どんなおおかみだったえ。」と、村むらの人々ひとびとは聞ききました。

「灰はいいろ色の大おおきいおおかみだった。見みたところでは年としをとつていいるおおかみだった。」と、彼かれは答こたえました。

「おともをしてきたのだから、なにかやればよかつたのだ。」と、中なかにはいったものもありました。

けれど、知恵ちえ自慢じまんの与助よすけは、得意とくいそうに笑わらつて、

「あのととき、鉄砲てっぽうでズドンと一発ぱつ打うてば、それまでだったのだ。

せめても、こつちが命を助けてやったのをありがたく思ったがい
 のだ。」といいました。

この話を聞いて 獵人のおじいさんは、頭をかしげて、

「そんなうそをいうもんじやない。おおかみがあだを返さなければいいが。」といいました。

これを聞いた与助は、おおかみの出るのをおそれて、その後町へいくにも帰るにも、みんなといっしよでなければ歩けなかつたのであります。みんなは、それをおもしろがつて、わざと帰りに、与助を後に残して、さつきときかかりますと、与助は死にも狂いになつてみんなを呼び止めながら、後を追いかけてきました。そして、いつしか、だれいうとなく、りこう者の与助は、

「臆病者おくびようものの与助よすけ」と、みんなからあだ名なされるようになって
しまったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「いづも雑誌」

1920（大正9）年1月

※表題は底本では、「おおかみと人《ひと》」となっています。

※初出時の表題は「狼と人」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：雪森

2013年4月10日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おおかみと人

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>